

新聞大会開幕

報道の在り方議論

139社参加 17年ぶり岡山で

新聞週間(15〜21日)

のメイン行事となる第59回新聞大会(日本新聞協会主催)が17日、岡山市内で開幕した。岡山県での大会は1989年以来17年ぶり3回目。協会加盟139社から約530人が集い、インターネット時代における報道の在り方や新聞の社会的責任について話し合う。(9〜16面に関連特集)

会長が「言論・ジャーナリズムに対して暴力で挑む動きがあることに強く抗議する。民主主義社会は情報が自由に流通し、自由に責任ある言論が保証されて初めて成立することを改めて確認したい」とあいさつした。

AMD Aの菅波茂代表が「人道支援におけるメディアの役割—AMD Aの経験を通して」と題して講演した。

午後からは岡山プラザホテル(同市浜2丁目)に会場を移し、昼食会を開催。席上でマラソンランナーの有森裕子さんが「よろこびを力に」と題してゲストスピーチを行

った。研究会談会では、藤田博司早大客員教授が「インターネット時代における新聞の公共性」と題して基調講演。続いて加盟新聞社5社の幹部によるパネルディスカッション「新聞の公共性・文化性を考える—新聞がジャーナリズムとして生き延びるために」が行われた。18日は備前市と倉敷市を視察する。

冷静さと責任を

第59回
大会決議

大会決議採択の後、新聞協会賞の授賞式が行われ、昭和天皇がA級戦犯靖国合祀に不快感を示したとされる「富田メモ」を特報した日本経済新聞社の井上亮記者ら5人に賞状が贈られた。続いて

中東情勢をはじめ、世界は絶え間ない抗争と緊張の中にある。わが国も少子高齢化、格差の広がりなど多くの課題を抱えている。人々は誰もが安心して暮らせる社会の実現を切望している。

情報環境が大きく変化する中、新聞は、活字文化の担い手として、きめ細かな取材と分析、冷静で責任ある報道により、人々に確かな指針と展望を示さなければならない。新聞協会創立60周年を



あの記事が わたしを変えた 未来を決めた

開会のあいさつをする北村日本新聞協会会長(岡山シンフォニーホール)